

## 第四十二回

### 豊国紀行と城井谷絵図



城井(宇都宮)鎮房が天正十六(一五八八)年四月二十日に中津城で黒田氏に謀殺されてから百六年後の元禄七(一六九四)年四月一日、一人の福岡藩士とその門下生十数名が黒田氏の旧領豊前・豊後国へ向けて旅立ちました。ちょうどこの頃は江戸幕府が『関ヶ原軍記』『大坂軍記』等を編纂するため、全国の各藩主に家譜及び史料の提出を命じた時期で、福岡藩主黒田家も藩の儒学者である貝原益軒(かいばらえきけん)にその編集調査を命じました。福岡から豊前・豊後国まで往復二十日間の旅で、この時、益軒は六十五歳であったといえます。

豊前・豊後国調査の際の見聞録『豊国紀行』によると、益軒たち一行は田川郡の香春から七曲峠(ななまがりとうげ・現在の国道二〇一号線仲哀トンネル北側の山中)を越え、天生田(行橋市)を通って、節丸(みやこ町豊津)で宿を取り、四月六日に城井谷に入っています。なお同書には「我この度城井谷を見まく欲しければ…」とあり、益軒が城井谷に行くことを強く希望したことが記されます。

さて六日の朝、節丸の宿を立った一行は山を越え、赤幡村(築上町大字赤幡)を目指しました。「築城の少し上、赤旗村。これ城井谷の口なり。」(原文のまま掲載)と記し、城井氏のかつての所領「城井谷」に入っています。益軒は当時の城井谷の様子を「伝法寺村より上は、谷の東西三町ばかり有り。此の谷東西これ山なり。高山にあらず。谷中に村多し。」と記し、小集落が点在した様子が想像されます。

同書をさらに読み進むと、「松丸村の上、道東の側に城井鎮房が隠居の宅にせんとて構えたる所あり。方六十間ばかり。まわりに小土手つきから堀あり。されど爰にはいまだ住せず。一説には此の処も城井が取出の塞なりと云う。」とあり、これは現在の築上町大字松丸集落南側の丘陵地のことだと考えられます。「松丸・宇都宮氏館跡」平成十一年度より五年間、町で発掘調査を実施)。

この記述の中で「道東の側に…」とありますが、現在の県道からだて館跡は西側に位置します。これは、当時の主要往還が現在の県道ではなく、城井谷西側を走っていたことを物語っており、このことは『豊国紀行』の絵図として描かれた『豊前国城井谷絵図』(福岡県立図書館所蔵)を見ても明らかです。

この後、益軒一行は城井氏の菩提寺「天徳寺」を訪れ、「天徳寺の南高き所に城井が宅の跡有り。数年住みしが常の宅にあらずと云う。」と記しています。かつての遺構を目にしたのでしょうか。さらに本庄の大楠を見て、黒田氏が城井谷を攻める際の拠点とした「茅切城(かやきりじょう)」「を見上げながら、一行はさらに谷深い「寒田」を目指します。「東の山より溝川流るゝ所の入口なり。其の少し東の方に城井氏が常に住し宅のあと有り。」(中略)前の川の西岸屏風を立てたるごとく、これ城井氏が宅の險要なり。」(中略)岸を掘りうがちて川よりのぼる道をつけたり。此の宅の上に城井が城跡有り。」とあり、天然の要害に囲ま



れた城井氏最後の城「大平城(おおひらじょう)」「と「溝口館(みぞくちやかた)」の様子が目に浮かんできます。

それにしても当時六十五歳だった貝原益軒の体力に思わず感心してしまいます。当時としては高齢に属した貝原益軒とその一行はこの後、「城井ノ上城址」も訪れ、「きのかう屋敷は城井氏が敵をのがれて、たてこもる所なり。」(中略)：谷のおくの果てなり。」と記し、下って峯合戦の地(黒田長政が城井氏に大敗北した)を経て、日没頃ようやく椎田の宿にたどり着いています。体力的にかなり無理をしているように思われますが、城井谷をぜひ訪れたいという情熱が貝原益軒を突き動かしたのかも知れません。

(文化財保護係 馬場克幸)